武田ミキ先生と私

小川　登

武田ミキ先生と私との直接の関わりは、一昨年上梓された「武田ミキ人間教育論」でも述べたとおり、大学の広報の仕事を通してのことが多い。そしてそのような接触の折に、私は先生の御意見と異なった意見を殆ど何の遠慮も無しに申しあげてきたものだから、先生がかつて使われた言葉をそのまま使うと、二人の意見が〝衝突する〟ことが、私が広報に関わった二十六年に及ぶ長い年月の間には、一再ならずあった。

振り返ってみると、昭和三十九年の四月に私が本学に着任して以来、近くで拝見し続けた先生の御姿を私の立場から一言で評すれば、これも前掲書で用いた表現ではあるが、「学長としての教育的希求と理事長としての経営理念の板挟みの中で、終始苦闘を続けてこられた方」というのが、今も私の心に強くきざみこまれている先生の印象である。そしてそのような苦闘を日夜なさっている先生に向かって、私の方は財務経営のことにはあまり頓着しないで、専ら教育的な見地及び広報宣伝的な考慮から自分の考えることを率直に申し上げるわけであるから、私の披瀝する広報の上の意見には、先生は随分戸惑いされ、心を悩まされたことであろうと、先生の長逝された今、改め

て推察申し上げている次第である。

とはいっても、ここで特に強調しておきたいことであるが、先生は御自分の意見をどこまでも固執して譲らぬという方では決して無く、当方の説明に納得がいけば勿論「よく分かった」と快諾されて、こちらの考えに同意してくださるし、納得の十分でない所が多少おありなのに適当な所で妥協してくださったように拝察される場合も、何回かあったことを是非記しておきたい。

例えば、あれは私が文学部の制度として、入試に受かり入学を望む者に、入学時も入学後も図書費と暖房費を除くすべての納入金を免除するという、「特別奨学生」募集の案を持ち出した時であったが、先生はこの案にはあまり御賛成ではなかった。何分にも文学部草創後まだ日も浅く、入学者の数が定員を遥かに下回っていた頃のことであるから、経営の責任者としては無理もない御気持であったろうが、私としてはその少ない入学者の数をすこしでも引き上げる呼び水として、出願者の保護者の納税状況に関する、市町村長の発行する証明書の提出を含む、幾つかの条件をつけての実施を、考えついたわけである。この時先生は前述のようにこの案にはあまり御賛成では無かったし、「分かった」という快諾の言葉もついに承ることは無かったが、結局御自分の考えは曲げて承認して下さり、昭和四十三年春に第一回の奨学生三名を受けいれる運びになった。（この制度は、その後十年あまり続いて行われたが、残念ながら私が始めに意図したようには事がなかなか運ばなかったのに加えて、今はまだ公表がはばかられるある理由――誤解を避けるために明記して置くが、このある理由というのはミキ先生とは関わりの全く無い理由である――から、結局提案者である私自身がその中止を発議して教授会の賛同を得、ミキ先生の了承も頂いて、中止になったまま今日に至っている。）

この件は単に一例であって、この他にも先生のお考えにさからうような考えを申し上げて、先生は多分色々とお悩みのあと、御自身の心のどこかで妥協点を見つけてくださっての事であろうが、快諾のお言葉は無いままに当方の提案の実施に賛成してくださった、という出来事を何回か経験した。これは先生が、世の事業経営者の中によく見受けられる、押し一方の御性格では決して無くて、柔軟で弾力的な判断基準を持っておられた事の明確な証明である。確か一度は、私がこのようなたぐいの申し出をした際に、小川は「経営を知らない」からそのような提案が出来るのだ、といった意味のことを、ハッキリと私に向かって申された事があるぐらいの先生であるから、このような時の先生の心中の葛藤のほどは私は十分に推察がついていたにもかかわらず、敢えて何回も似たようなことを繰り返したという次第である。

ミキ先生が柔軟で弾力的な判断基準をお持ちである事の証左として、私が何度も先生のお考えにさからったような意見の具申に及んだことを以上申し述べてきたが、その中には、実行してみて事がうまく運んだ場合も勿論あるが、前掲特別奨学生の件が示すように、事が首尾よく運ばなかったものもある。上首尾の結果を見ることが出来た場合も、事が成功の緒につき、或いは成功の見通しが確実に得られるまでは、当然一定の時間が経過する——しかも通常の企業ではなく教育の場での試みであるから、それは長い年月となる事が多い——わけであるから、その多くは長期にわたる間、先生に色々と御心配をおかけしているわけである。その事に思いが及ぶ時、それは勿論私の広報という仕事にかけた熱意から出た振舞いであったのではあるが、今日心が少なからず痛むのである。ミキ先生はもう此の世には居られないが、この事について御霊前に心からお詫びを申し上げねばならない。

本学の今日の盛んな状況しか知らぬ方々には推察がつかない事であろうが、実際のところ、私が本学に来任した

昭和三十九年の春、当時はまだ可部女子短期大学（二学科で構成されていた）であったが、二年次生の定員百二十人に対して、入学者は僅かに五十三名という有様であった。学園のこのような状況を目のあたりにした私は、翌四十年の四月、つまり着任後一年しかたっていない新米であることも顧みずに、広報に係わる主任という責任の重い役目を、敢えて私の方から買って出たのであるが、それは勿論この役目に対する相当に強い決意を胸中に秘めてのことであった。今相当強い決意と書いたが、爾来二十六年間私は、状勢の変化に押されて時に弱気になりがちな己の心に鞭打ちながら、自ら顧みても随分踏みこんで、かつまた私なりにではあるが積極的に、広報の役割りに係わって来たと考えている。

元来どちらかというと引っ込み思案の方である私が、こと大学の広報に関してはこのような姿勢を取り得たことの根底には、本学が三度目の私学での勤務である私の中に、私学人としての哲学とでもいったものが少々根付いていたという点もあろうかと思うが、その事以上に、実を言うと私には、私立学校の経営に手を着けた縁者が三人ほど居て、うち一人は東京で何とか成功に漕ぎ着ける事ができたが、後の二人は広島県内の郡部に於てであったが、両者とも成功に至らず、紆余曲折を経たのち結局、苦心惨憺して育てたそれぞれの学園を県の経営に移管するという不運を経験しているのである。この二人の縁者の、見果てぬ夢の顚末を詳細に承知している私としては、前記のような本学の危機的な状況に直面した時、これを黙視して通るのは少々しのび難いことであったわけである。

在天のミキ先生におかれては、私が縁あって先生の学園経営をお手伝いすることとなって今日に至る三十年に垂んとする年月の間、私が抱懐し続けて来た、唯今申し述べた私学人としての存念の程を何卒諒としてくださって、此の間の広報活動に関わっての私の非礼をお許し頂くように、切にお願いすると同時に、このような次第であるの

で本学園の将来は私にとっては決して他人事では無く、今後も何時までも私の大きな関心事であり続けるであろう事を――この気持は先生の御存命中にも直接申し上げた事があるが――先生と幽明さかいを異にすることとなった今、此処に重ねて記して先生の御霊に捧げたいと思い、拙い筆を取らせて頂いた次第である。

合掌。